
夢で逢えたら

海月くらげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢で逢えたら

【Nコード】

N6991I

【作者名】

海月くらげ

【あらすじ】

ぬくぬくとしたまどろみ・・・それは何よりの至福。
その安らぎを与えてくれるのは、あなた。

寝返りをうつて俯せになり、枕に腕を絡めて顔を押しつける。

そしてまた微睡む。

深い睡眠ではなく、目覚めと眠りの間を行き来する穏やかで緩やかな時間。

至福。

本当に何より幸せを実感できるこのぬくぬくとした優しい空間。
ここにいつまでもいたいと思うのは、終わりが近づいてきているのをどこかで感じているからだろう。

「起きる」

現実離れた現実って夢なのだろうか。

「おい、いつまでも寝てるんじゃないねえ」

小説より奇なり、とはよく言うけれど、いつまでも続く決して終わらない状況は悪夢ではないのだろうか？

「聞こえてんだろ？シカトしてんじゃねえ！」

——つまりこれは夢だ。

「重いんだよ早く起きろ！」

「うるさい」

せつかくの現実逃避が無駄になった。

こいつはこっちが起きるまで騒ぎ続けるだろう。どっちにしろ眠気は消えたり起きるしかない。休日で暇とはいえ、やることがない

でもないのだ。

「いつそ捨てたい……」

「ああ？」

しかしやはり恨みがましく見てしまうのは、先程の微睡みがあまりに心地よかったからだ。

わざとらしくため息を吐いてみせると、馬鹿にしたような声が返ってきた。

「は。俺より具合のいいやつなんてこの世にいないぜ」

たしかに、こいつは自分にとって最高のパートナーだと思う。
やわらかで艶やかな肌ざわりはうっとりするほど心地よい。
適度な弾力とふかふかな感触。そして日向の香り。
ぎゅゅつと抱き締めるのにちょうどよい大きさ。

まさに理想の枕だ。人生においてこれ以上の枕は見つからないだろう。

———
しゃべることを除けば。

[illegible]

小さい頃から寝付きが悪い上に眠りが浅く、夜中に何度も目が覚めてしまったために慢性的な寝不足だった。

いつも幼い子供に不釣り合いな隈を目の下につけているわたしを心配した祖母が、わたしが七歳のときにどこからか手に入れてきたのがこの枕。

最初はしゃべるなんて思わなかった。当たり前だ。

病的な白さではなく、ほのかに温かい色をした枕をわたしは一目で気に入った。

祖母から受け取ったその日はそのままこの枕とともに眠りについた。

気に入った枕と言えどもやはりすぐに寝付きがよくなるわけではなく、何度も寝返りをうちごろごろしていた。

——早く寝ないと、明日も頭が痛くなっちゃう。

焦れば焦るほど眠りの腕から擦り抜けて遠ざかる。

身体は眠りを必要としているのに、どうしても意識が沈んでくれない。

そんなわたしの耳元に声が届いたのがその時だった。

「眠れねえのか？」

ぞんざいな口調だった。いきなり聞こえてきたのにも関わらず恐いと思わなかったのは、その声がどこかわたしを案じているような響きをもっていたからだだった。

ただ、どこから声がするのか不思議に思い、身体を起こして周り

を見回した。

眠りの浅いわたしを起こさないように、わたしには小さい個室が与えられていた。この部屋には他に誰もいないはずだった。暗闇に目を透かすようにしてあたりを見回す私に、傍らからさらに声が掛けられた。

「こら、もう遅い。さっさと布団を被れ」

わたしは周りを見回しつつも、声に従い布団に再び潜り込んだ。

「よし。風邪をひくと困るからな、しっかり潜っとけ」

多少口調は古風で乱暴だが、耳にやさしい低くて穏やかな声だっ

た。

「子供には子守歌かお伽話と昔っから決まってる。どれ、なんかひとつ話してやろう」

と、勝手に納得して、深く染み込むような声を響かせて昔話を始めた。

何度も聞いたことがあるけれど、聞き飽きることがない大好きなお話、そして眠りを誘う優しい声。

わたしは知らずのうちにあれほどまでに遠かった眠りに落ちていた。

——その日は、夜中に目も覚めなかった。

そんな最初だったからか、わたしは驚くほどすんなりこの枕を受け入れた。

この枕はわたしが布団にいるとき以外はしゃべらないし、ややお節介だが物知りだ。

身体の成長にあわせて枕の高さを変えるべきなのだろうが、なぜかいつもわたしに調度よい高さになっている。

不思議に思っただけを尋ねたが、

「そりゃ、お前のための枕だからな」

と、納得できるようなできないような曖昧な答えしか返ってこない。

でもかまわない。

どんなに不思議な存在であろうとも、わたしにとっては最高の枕なのだ。

枕はわたしの寝付きが悪いと、子守歌やお伽話を聞かせてくれる。枕の声は決して大きくはないし、高くないから遠くには聞こえないだろう。しかし耳元で囁かれるにはそれがちょうどよい。愛しい我が子に聞かせているかのように、甘く穏やかな声で歌うように語れば、わたしはあつという間に夢の世界に旅立つのだ。

おかげで枕が来て以来、わたしは寝不足とは無縁の生活を送っている。

枕がわたしの枕になって10年が経った。相変わらずぞんざいな口調だし、七歳の時と同じようにわたしを子供扱いしている。

こっそりと年の離れた兄のように思っているのは内緒だ。

「おはようさん。さつさと起きて顔でも洗ってこい。そんなぼけつとした寝呆け顔いつまでもさらしてんな。歯をみがいて朝飯を食え」

「おはよ…」

本当に枕はわたしをいくつだと思っているのか。本当に口うるさい兄のようだ。

そう思いつつも言われた通りに行動するために身を起こして伸びをする。

「さあ、1日の始まりだ。——よい1日を」

わたしの枕は本当によい枕だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6991i/>

夢で逢えたら

2011年10月9日22時35分発行